すずかけ作業所の移転について

すずかけ作業所
管理者 松永 康司

「西宮市手をつなぐ親の会」(現在の西宮市手をつなぐ育成会)を中心として、たくさんの方々の尽力により、1984年に法内化され、すずかけ作業所が現在の地（津門大塚町）で始動して36年が経ちます。何もないところから地道な活動の積み重ねによって、今ではまさに「地域に根付いた事業所」になっているのではないでしょうか。それでも開所に向けての動きの中で、当初は激しい偏見や反対運動も起こったと聞いています。それらの背景や先人たちが築き上げてきた歴史を知ることで、一羊会の基本理念にもある「住み慣れた地域の中であたりまえに働き、活動し、いきいきと暮らせることをめざします」という文言が、より一層、重みを増して感じられます。ひょっとすると、今では当たり前に感じる言葉かもしれませんが、私はこの一文に深く共感し、大事にしていきたいと思っています。

そんな伝統あるすずかけ作業所が現在直面している問題が利用者の方々の高齢化です。

これは、すずかけ作業所のみならず、一羊会としての大きな課題でもあります。その課題を解決していく為の１つの手段として、移転してからのすずかけ作業所の役割を考える必要がありました。

木工班で作業する利用者の皆さん。
新型コロナウィルスへの様々な対策をとりながら、
作業所の活動も再開されています。

「親亡き後に、年老いた子供が安心して通える場所があるか」そのような声を実際よく耳にします。一羊会では、すずかけ作業所のサニースポットや、武庫川すずかけ作業所のランプ班が、数年前から、高齢化や身体機能の低下に対して取り組みを始めていますが、ハード面やキャパシティーの問題もあり、増え続けるニーズに対応することが困難になってきています。そこで「地域の中であたりまえに働き、活動し、いきいきと暮らす」を守り続けていく為にも移転を機に、新しいすずかけ作業所の役割として、高齢利用者にも対応できる事業所に設定することで話し合いが進んでいきました。移転計画は2015年度より始まり、候補地が何度も変わりながらようやく今津出在家町に移転場所が決まりました。

前置きが少々長くなりましたが、それでは移転後のすずかけ作業所の紹介をさせて頂きます。

　１Ｆは車いすの方が増えてきても対応できるように、ゆったりと広いスペースを確保しており、理学療法士によるリハビリを受けられるスペースも用意しています。その他、なかなか外部のプールを利用して運動できない人や、肥満・麻痺の影響などで、思うようにウォーキング出来ない全利用者を対象として、水中をウォーキング出来るように「歩行浴」を設置します。歩行浴は腰の高さくらいまで水を張り、手すりを持って浴槽の周囲を歩けるようになっています。また、水温管理も出来るので、季節を問わず利用することができ、さらに水流もつけられるようにしているので、軽い負荷をかけてウォーキングすることも可能です。

　２Ｆは高齢であっても身体・認知機能の低下が顕著には見られない方が生活の質を高めるための活動をする班と、作業・活動のニーズが混在する方の班が入ります。

＊イメージ図ですので、実際は異なる場合もあります。

　３Ｆは、高齢で今までの作業が難しくなった人でも労働に携われるフロアとして考えています。縫製や植物栽培事業・木工作業を中心に魅力ある商品を作りながら収入を得るために、日々軽労働をそれぞれのペースで行います。

　４Ｆは、ホールとして活用する予定です。

　新しい建物は2021年３月末に完成する予定です。

　ちょうど５年前に「西宮市手をつなぐ育成会」の機関誌「手に手を」の中で「サニースポット～５年後、10年後を見据えて～」というタイトルで高齢者支援について私が書いた文章を掲載して頂きました。ビジョンは持ちながらも暗中模索で支援にあたっていた当時、その文章の最後をこう結びました。

「老化は誰にでも例外なく訪れ、待ってくれません。その状態を迎えた時に、当事者の方が不安を感じることなく、利用できるサービスを準備していくことが急がれます」

　あれからまさに５年後の今、地道に続けてきたことが膨らみ、幅を広げようとしています。そして10年後（今後５年）には、胸を張って「利用者の皆様のニーズに応えられています」と言えるような医療機関・専門職との連携に加え、知的しょうがい者の方への支援ノウハウがあり、高齢者支援も出来る事業所に成長したいと思っています。

　今後も伝統をしっかり受け継ぎ、守るべきものを大切にしながら新たな時代の新たなスタイルの「すずかけ」に生まれ変わり、しっかりと役割を果たしていけるように職員一同、精進していきます。